

私と本と税金

鳴門教育大学附属中学校 3年 瀧 可南子

私の趣味は読書だ。両親が本屋に連れて行ってくれる度に本を1冊買ってくれるのだが、それが昔からとても嬉しくて楽しみだった。しかし、月日が経つと読んだことのある文庫本が部屋の片隅の住人と化し、その本達の存在をもてあますようになった。漫画なら何度も読み返すが、文庫本は2回読み返すのが関の山である。部屋の片隅が読まなくなつた本で埋め尽くされていくのも悩みだったが、1回だけしか読まない本にお金をかけてもらうのも子供心にどうなのかと思い、小学4年生の頃から図書館へ連れて行ってもらうようになった。図書館は素晴らしいところだ。自分が読みたい本が無料で読めるのはもちろんだが、自分だと選ばないような本も気軽に借りて読むことができ、その上読み終わった本が部屋の片隅でところなさげに存在しなくなつたのはとても嬉しいことだった。自分で買うことに比べてのデメリットをあげるならば、返却日を守らなければならないことと、本の扱いに気を遣うところくらいだ。

図書館に行くと、老若男女問わず、多くの人が本を借りにきていたり、読んでいたりする。たくさんの本が整然と整理されて並んでいる様はとても気持ちが良い。図書館がどうやって維持されているのだろうと、小学6年生のときに疑問に思ったことがある。図書館には古い本もあるが新しい本も購入されているし、本をきれいに管理する図書館司書さんが何人もいるので、維持するにはそれなりにお金がかかるはずだが、私が本を借りるときにお金を取られることはなかったからだ。父に聞くと、「公共サービスとして税金でまかなわれているんだよ」と教えてくれた。その時は、「ふーん」としか思わなかつたが、じわじわとその当たり前のことことがすごく有り難いことだと思うようになった。

納税が国民の義務だということは小学校で習つたが、納税自体を自分事として意識していなかつたため、ピンとこなかつた。しかし、身近な生活インフラが、国民から納税されたお金で維持されていると分かると、納税の重要性がとても理解できた。納税の重要性が分かってくると、税金の恩恵を誰もが平等に享受できるシステムで動いている今の社会はすごいことだ、と改めて感じることができる。当たり前のように道路はきれいに舗装されているし、水道は蛇口をひねれば飲料水が出てくる。他にも、生活ゴミの収集や警察、消防などの社会インフラも税金からまかなわれているが、やはりすごいことだと思う。

こうして、自分たちが住みやすい環境を整え、その環境を維持し、互いに幸せになれるように皆がお金を出し合うことが「納税の義務」の重要な意味だと、身近なところからも感じることができる。私自身も私の家族も、私の友達や他の人達も、誰もが幸せな環境で生活できるように、「納税の義務」を果たし、社会に貢献できる大人になりたいと私は思う。